所沢市立美原中学校

学校だより No１１

令和６年度　第１１号
１月　９日（木）

学　校　教　育　目　標
・進んで学ぶ生徒（知）
・心豊かな生徒（徳）
・たくましい生徒（体）

志を立てる。すなわち生き方を考え、誓う。

明けましておめでとうございます。皆さんをはじめ家族の方々もお変わりなくお過ごしだったでしょうか。幸いにも本校では、今のところ大きな事故の報告もなくホッとしているところです。

さて、今日の始業式は、「志を立てる。すなわち生き方を考える。」と言うことについてお話をします。

ご存じの通り、3 学期は、1 年間のまとめと来年度の準備の学期です。実質的に学校に通う日数は、1・2年生で、53日、3 年生に至っては、卒業式の日を含めても 46日です。この3学期の貴重な一日のスタートを皆さんと一緒考える機会にしたいと思います。大切な内容ですが、今日、急に何か大きなことを決定するということではないので、落ち着いて聞き、良く考える機会にしてください。。

さて、よく「一年の計は、元旦にあり」と言われています。私が子どものころからある漫画サザエさんをみても、元旦に浪平お父さんが、書初めで、「禁煙」と書いたのに3日で終わってしまったり、今年は、日記を書くと決めて始めても1週間足らずで終わってしまうなど、物事を決めても続かないことがよくあります。いわゆる三日坊主です。自分の経験からも、こんな小さなことが、たくさんあるのは、理解できますし、他人のことでも、見たり聞いたりします。そのような中で、私が一番長く続いているのは、現在進行形の 42年目、教員としての仕事です。仕事なので当たり前と言われてしまいかもしれませんが、今は、転職をしなくてはならないのか、または、キャリアアップのためなのか、転職サイトの CM がよく流れ、転職するハードルが低くなっているように感じます。世代なのか、私個人の考えなのか、これに関しては、少々びっくりしています。仕事を変えることは、悪いと言いませんが、その人にとって良い仕事、やりたい事とは、どんなことなのか。そもそも一個人の要望や期待に合った仕事が、そうそう見つかるのかと考えれば、そんな簡単なことでは、ないことがすぐわかります。あとは、自分の意思を生かしての起業ですが、それも収益をあげることを考えれば大変なことです。

では、話を少し戻し、今回、何を伝えたいかを直接触れると、「志」が大切なのではないかという話です。「志」を立てても、事の次第で具体的な事柄については、変わっても、良いと思います。本当に大きな例ですが、「日本の将来を良くしたい」という「志」を持ったとします。医者として日本の国で働く人々を助けることや教員や塾の先生など教育関係者として、日本の将来を担う人材育成をするなど、「志」を軸に考えれば、多種多様な選択肢があります。しかし「志」は、一つです。皆さんには、そんな自分の生き方、「志」を見つけてほしいのです。 以前お話しした「自分の好きな言葉」や「座右の銘」によせていくのも一つの方法ですが、その「志」があれば、何事にもぶれず、自分のやることに意味を感じ、挑めます。力も湧き継続もします。いかがでしょうか。

さて、最後に、あの有名な米国人のクラーク博士が札幌農学校（現 北海道大学の前身）を辞して日本を去るとき、教え子たちに贈った「Boys, be ambitious」「少年よ 大志を抱け！！」は、あまりにも有名ではありませんか。そして、この後に「like this old man （この老人のように）」と付け加えられてたといいます。この後に続けられていた「この老人のように」は、「あなたたち若者よ、私のように志を成し遂げるために情熱的であれ、しかし、利己心を求める自分であっては、ならない」と伝えたそうです。*（諸説あり）* 私は、なかなか自分のことをこのように言うのは、難しいのですが、若者に、このように言い残せる人は、素晴らしいと感じます。私は、3 年生の面談で、自分の将来像を「人の役にたちたい」と告げていた生徒の声を多く耳にしました。美原中学校には、きっと1，2 年生にも、このような生徒がたくさんいるのだろうと考えます。是非、この少ない 3 学期に様々なチャンスに自分の「志」について考えてみてください。できれば、それを軸に新たなる一歩を踏み出してください。

令和７年１月８日 始業式 式辞より

校長見聞録

お正月には、初詣に行かれた方も多いと考える。今年初めの見聞録では、そのことを意識して、始業式の式次の続編としてお寺の話がしたい。「油断大敵」の言葉の語源となる1200年にわたり「不滅の法灯」を守るために「油」を絶やさない「断」をしない修行僧のいる滋賀県、比叡山延暦寺の話をしたい。今まで何度も京都に行ったことがあるが、この比叡山には、ひとしきりの思いがある。中学生の時に初めて延暦寺の根本中堂にはいり、説法を聞いた。当時は、全員正座で無駄話をしようものなら先生であっても烈火のごとく叱られた。びっくりした。教員になってからは、元気の有り余っている生徒を連れお話を聞かせていただいたこともある。以前、話したことのある。「一隅を照らす者、これ、国の宝なり」もこの寺の言葉だ。再びこれに触れたい。

国の宝とは、何者ぞ、宝とは、道心（どうしん）なり。
道新ある人を名けて国宝と為す。
ゆえに故人曰く、径寸（けいすん）十枚、是れ国宝にあらず。
一隅を照らす、是れ即ち国宝なりと

道心：志を同じくすること、協力すること

けいすん：金銀財宝

一遇：ほんの一片

「一隅を照らす者、これ、国の宝なり」と言う意味は、ざっくりと言うと平安時代、天台宗の開祖、最澄が、残した言葉で、誰もやろうとしていないことや、誰も気づいていない「一隅」にスポットライトを当て、「何とかしよう」と変化を起こすことこそ尊い、という意味だ。ひとり一人のバックグランドや環境に応じた自分なりの一隅を照らすことが大事だと言っている。「一隅を照らす者が集まれば、その光は、国全体をも照らすことになること、ここに、大きな意味を感じる。「一隅」とは、皆が気づいていないほんの片隅、一片のことを指す。一隅にスポットライトを当て、「何とかしよう」と変化を起こす人が、国の宝であり、人間として最も尊敬されるべきだと、最澄は、言う。本当に自分のできることで良い。それが学校の宝、国の宝なのですから。「一隅を照らす者、これ、国の宝なり」という言葉に私が共感するのは、「誰にも一遇が見つけられる」ことだ。地位や名声などなくても、その人がやれることを精一杯、一生懸命にやる。ひとり一人がやれることがある。
良く手を合わせる正月だからこそこの話に触れたかった。

引用：平凡社「最澄の教えと十二年籠山行より

※時代なのか、今やこの寺で生徒や先生が叱られる場面は、観ない。ただ今も不滅の法灯は、消えていない。